

# 山本勘助関係の歴史

<参考文献> 山本勘助のすべて (新人物往来社), 豊川市史

年 号	山本勘助の動向	武田家の動向
1500年(明応9)	豊橋市賀茂町に生まれる。幼名「源助」	
1514年(永正11)	牛久保の牧野家家臣大林勘左衛門貞次の養子となり、名を大林勘助貞幸と名乗る。	
1521年(大永1)		・武田信虎の嫡男武田信玄が誕生
1525年(大永5)	武者修行に出る。高野山で摩利支天を受け、これをお守りとして四国、九州、山陽、山陰を巡遊し、毛利氏、尼子氏に仕える。戦法・築城について学ぶ。	
1534年(天文3)	大林家に帰る。同家に男子出生のため離縁し山本の姓に戻る(山本勘助)。三河を出て、従兄弟の庵原安房守を頼って今川義元に仕官を申し出るも受け入れられず。(9年間)他の訪問先、小田原の北条氏、鎌倉の上杉憲政、上州の倉ヶ野越中の守、信州の真田幸隆。	
1536年(天文5)		・信玄元服、武田晴信と名乗る
1537年(天文6)		・武田信虎と今川義元が同盟。
1538年(天文7)		・信虎と晴信父子の不和。
1541年(天文10)		・晴信が父信虎を駿河に追放。
1543年(天文12)	武田晴信より知行200貫を得て仕官。その後の活躍により100貫を重恩。	・武田晴信、信濃大井貞隆、望月一族を攻略。
1544年(天文13)		・武田晴信、伊那信濃に出兵する。
1545年(天文14)	信玄の命により高遠城を大改修する。	・武田晴信、諏訪衆の反乱を鎮圧。 ・山本勘助の進言で、諏訪頼重の息女を側室に迎える。
1546年(天文15)	武略をめぐらし、村上軍を撃退した功により、晴信、足軽50人、知行500貫を増。合計足軽75人、知行800貫。駿河国庵原氏のもとに5日滞在して甲府に帰る。(故郷に錦を飾る)	・晴信と諏訪頼重息女との間に、四郎勝頼が誕生する。
1550年(天文19)	信濃戸石城(上田市)合戦で軍功。	
1551年(天文20)	剃髪し「道鬼斎」と信玄から名づけられる。	・武田晴信、出家して信玄を称す。
1553年(天文22)	海津城築城(長野市)で軍功。	(1559年永禄2の説も)
1561年(永禄4)	第4次川中島の戦いで討死(62歳)	・武田方は、武田信繁(信玄実弟)も討死。

## 山本勘助ってどんな人？

江戸時代初期の1621年頃までにまとめたとされる軍学書「こうようぐんかん甲陽軍鑑」は、武田信玄・勝頼の二代にわたる事績・合戦・軍法等を記した書物として、江戸時代には武家の教養書として広く読まれていました。この中に、山本勘助は三河牛久保出身と書かれています。しかし、他に明治時代以降の研究で信頼できる古文書や記録に山本勘助の名が登場しないこと、「甲陽軍鑑」がどの程度史実を正しく伝えているかが疑問とされたことにより、山本勘助の存在そのものが疑われました。ところが、1969年（昭和44）に北海道で実在を示す古文書が発見され、存在が確定されました。

山本勘助は、このように存在が疑われたほどですから、生涯の行動を伝える資料は非常に少なく、謎につつまれた人物といえます。そのためか、生誕地や家系をはじめ、軍師としての活躍やその生涯についても、いろいろな説があるようです。



### やまもとかんすけ 山本菅助

生年未詳 ～ 永禄4年9月10日（1561年10月18日）

かい はるのぶ 甲斐武田晴信の家臣。菅助，勘助，道鬼斎。

いみな 諱（本名）は晴幸といわれるが確認できない。確実な資料としては、こうじ弘治3年（1557年）6月，えちご越後上杉謙信に攻められたが，これを撃退した信濃国衆計見城主市川藤若に対し，今後は敵が来襲した場合に，すぐ援軍派遣の手はずを整えたと知らせた晴信書状を持参して，口上を述べた使者として登場するのが唯一の所見。「甲陽軍鑑」によれば，うしくぼ三河牛窪の出身で，諸国を見聞して兵法や築城術を研究し，合戦にも数多く参加したが，そのため満身創痍で隻眼，さらに片足も不自由となった。しかも生来の色黒で不器量であったことから，するが駿河国今川氏への仕官を望んだが容れられず，い はら庵原氏のもとで鬱々と過ごしていた。だが板垣信方の招きによって武田晴信（信玄）と対面した。晴信は不器量にもかかわらず，けっしゅつ名高いのは傑出した才能の持ち主の証拠と見て，足軽大将に抜擢した。その後，といし戸石合戦などで活躍するが，えいろく永禄4年（1561年）川中島の合戦で戦死した。

戦国大名辞典（吉川弘文館）より

# 勘助はどこ生まれ？

山本勘助の出生地と伝えられる場所は全国にいくつかありますが、その中でも豊橋市賀茂町と静岡県富士宮市が資料的にみて有力とされています。

## ① 三河国賀茂（豊橋市賀茂町）

<根拠> 「三州牛久保より出申候山本勘助先祖之覚」「牛久保密談記」<sup>かいこくし</sup>「甲斐国志」  
駿河出身で賀茂を領した山本<sup>ずしよ</sup>図書（牛久保密談記では藤七郎）の三男（甲斐国志では四男）として生まれたとされています。賀茂町には山本<sup>はるよし</sup>晴幸（勘助）生誕地の碑があり、近接する本願寺には勘助の父母のものと伝わる墓があります。また、同じく賀茂町にある<sup>てりやまじょう</sup>照山城は、勘助の出生地とされています。

## ② 駿河国富士郡山本村（静岡県富士宮市）

「吉野家祖先累代略歴」「甲斐国志」  
山本<sup>へんれき</sup>図書は諸国を遍歴して「山本浪人と称して三州牛窪に住」したが、後に駿河に帰った時に四男として生まれたのが勘助とされています。

## ③ 三州牛久保（豊川市牛久保）

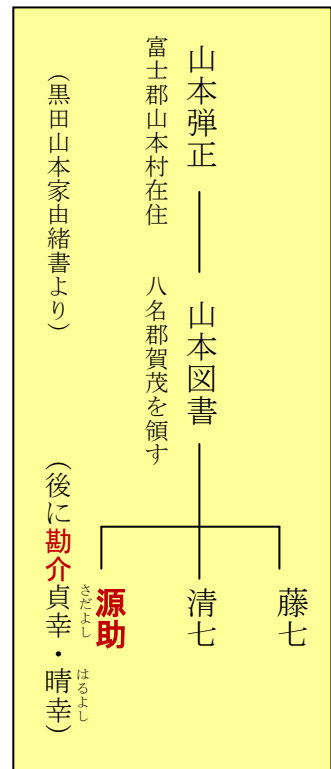
「甲陽軍鑑」「山本勘助先祖之覚」  
甲陽軍鑑は出生地を牛久保としているが、裏づける資料は今のところありません。  
1514年（永正11）牛久保の牧野家の家臣大林勘左衛門貞次の養子となり、<sup>さだよし</sup>勘助貞幸と名乗ったことは確かなようです。

近年の研究では、今川氏の家臣として駿河に在住していた山本氏の分家が八名郡賀茂郡に所領を給されて来住したことが分かっています。しかし、勘助出生の時期と山本氏が来住した時期ははっきりせず、未だ勘助の出生地については不明のままです。

<参考> 豊川の人物誌展（桜ヶ丘ミュージアム）



豊橋市賀茂町の勘助生誕地碑



## 勘助の子孫と一族

勘助の家族や子孫について記された同時代史料は全くないようです。富士宮市山本をはじめ豊橋市賀茂，豊川市牛久保の伝承によれば，それぞれに「勘助に子供がなかった」としているのに対し，新城市黒田山本家の伝承（先祖之覚）や甲陽軍鑑などでは，「勘助に子供があった」とされています。

甲陽軍鑑では，勘助の子息は若年ながら2，3度よい働きをしたが，1575年（天正3）長篠合戦で討死とされています。その名を源蔵，「甲斐国志」では<sup>こくし</sup>勘蔵<sup>かんぞうのぶとも</sup>信供と伝えられています。勘助の家族を具体的に示すのは，山本家に伝わる「先祖之覚」です。それによると，勘助の妻は原美濃守虎胤の妹または姪で，嫡男勘蔵は父討死の時6歳，長篠で討死の折は20歳で，所領は200貫文とされています。

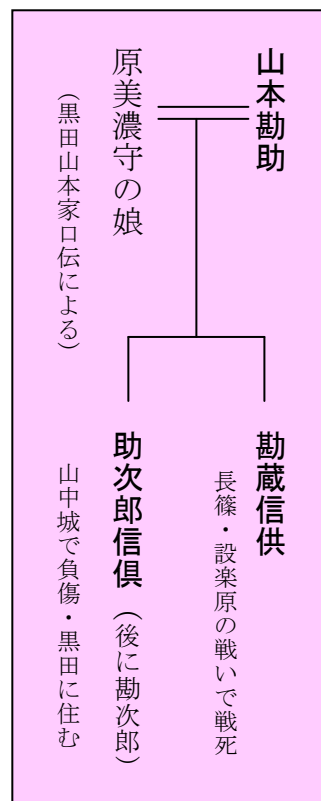
二男助次郎は，父討死の時2歳，天正2年に15歳で武田勝頼の奥小姓となり長篠へ出陣し，敗戦後に勝頼に従って甲斐へ帰ります。武田氏滅亡の天正10年，甲斐深沢城の加勢に派遣され，<sup>ろうじょう</sup>籠城衆が北条氏に降伏した際に同行。天正18年の豊臣秀吉の小田原攻めの際，伊豆箱根の山中城で討死，31歳だったとされます。

「先祖之覚」では，討死した二人の他に子供はなく，また勘助の孫にあたる世代について記述はないので，男系子孫はいないこととなりますが<sup>まつえい</sup>勘助末裔と名乗る人々が近世以来各地に出現しています。

黒田の故山本文夫氏は「山本勘助十三代当主」を自称され，昭和50・60年代に精力的に勘助研究を進められました。この覚書の筆者は山本氏によると，助次郎と四代目の兵四郎利平とされています。利平は，大阪の陣で豊臣方に加わって，敗北後は，宇利庄半原の春日寺（寛永8年・1631に洞雲寺）に潜伏していたとされます。

洞雲寺二世住持の成就院勢範（寛永15年・1638～宝永6年・1708）は鳳来寺衆徒で，真言宗の代表者として出府5回を経験しています。彼は太田白雪が「三河国三記録者」の一人とした三河地誌研究の先駆者でした。洞雲寺の本尊薬師如来縁起の筆跡は「先祖之覚」に類似しているとされ，年代や経歴からみて，地元における山本氏系図や勘助伝承を集成して「先祖之覚」をまとめ上げた最有力候補者のようです。

<参考> 豊川市史





## 黒田山本家の伝承

勘助の長男、<sup>かんぞうのぶとも</sup>勘蔵信供が1575年（天正3）、長篠設楽が原の戦いで戦死、二男の**助次郎信俱**（のち勘次郎信俱）は、武田家滅亡後北条氏に仕え、1590年（天正18）駿河山中城の合戦、秀吉の小田原攻めの時、戦死したとされているが、これは真実ではないと山本家で伝えられています。深手を負いながらも先祖の菩提寺である駿河の先照寺（富士宮市）に逃げ、その寺に潜伏して傷を治した後、父祖の旧領地の一部である三州八名郡宇利庄**黒田村**まで逃げて土着したとされています。これは先照寺にも、勘助の子供が傷ついて逃げてきたという言い伝えがあり、一致しています。

2013年に発行された「常在戦場～五十六・勘助の理念を尊重」という冊子には、先照寺39世住職の話として次のように紹介されています。

「勘助の三世（助次郎）は、山中城から愛鷹山を越えて先照寺にたどり着いた。助次郎は家伝薬を持参しており、3ヶ月ほど屋根裏に潜んで治療し、何処へ行くとも言わず出て行った。先照寺の隣家は住職の祖母の家で戦前まで「<sup>こうやく</sup>膏薬家」で、膏薬は評判でよく売れ、資産家になった。」

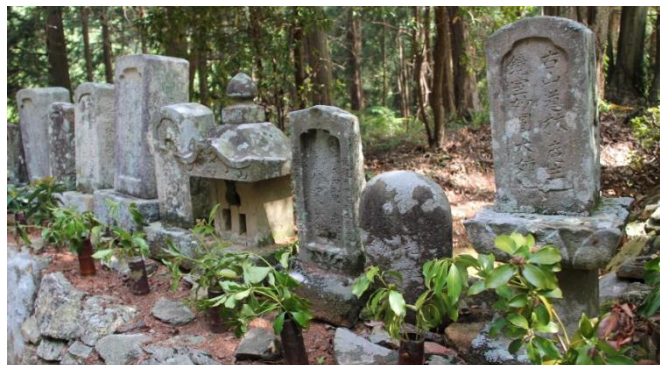
この薬こそ、新城黒田山本家にも家伝薬として伝えられており、新城でもよく売れたとの伝承や、1795年（寛政7）に七代五郎左衛門の時、京都御所に<sup>さんだい</sup>参内した記録が残されており、通じるものがあります。助次郎が黒田をめざしたのは、長篠古戦場があり、兄勘蔵信俱の戦死地があるためだろうとされています。

一方、山本家の由緒書の系図にはもう1枚残されており、それによると勘助には長男の信供、二男の助次郎の他に、長女の伊勢守の母、三男の善左衛門の**4人の子**がいたとも記されています。このうち長女は腹違いの子と推測されているようですが、やはり子供にも謎が多いようです。

<参考> 「山本勘助のすべて」「山本勘助」上野晴雄 新人物往来社  
「常在戦場～五十六・勘助の理念を尊重」 山本信夫・良子



2代勘助（信供）の供養塔



山本家の墓所 右端が3代勘助（助次郎）の墓